

説 林

九連城の古名に就いて

箭 内 互

九連城は鴨綠江下流の右岸に位する一都會なり。近年所謂安奉鐵道敷設せられ、江を隔て、京義鐵道と相對し、朝鮮と滿洲との運輸交通は主として之に由るに至りしより、安東縣獨り股脈を擅にして九連城は年と共に寂寥に赴くこととなりしも、鐵道敷設以前に在りては、九連城經由の道路は滿韓交通上唯一の大動脈たりしなり。殊に此地が滿韓の界上に在りて軍事上殆んど唯一の要地たることは、近く日清日露の兩戰役に際し、此地の得喪が彼我兩軍によりて非常に重大視せられし事實に徴しても、その一斑を知るべし。さて九連城が果して此の如き重要な

都會なりとせば、その地は古來滿韓の歴史上特に著名なる地位を占めたりし者ならざるべからず、而も九連城の名は明代の中葉西曆一五〇〇年前後に於いて起れり。

然らば、それ以前に於いて如何なる名を以て著はれたりしか。問題頗る小に似て實は小にあらず、細心に之を攷究すれば、往々にして滿韓史上の重大なる問題に接觸するを得ん。

卑見によれば、九連城は遠く漢代の初より、連綿として重要な地位を占め、以て今日に至れり。而して之れ一に滿韓交通の要衝に當り、山河の險自ら一城廓を成せるが爲めなり。而も古來その名一ならず、先づ古きより尋ねて次第に新きに及ばん。

兩漢魏晉の世には西安平縣として、若くは略して

安平として知られたり。漢書の地理志に遼東郡の屬縣の一として西安平を數へ、且つ「馬訾水西北入鹽難水、西南至西安平入海」と見ゆ。馬訾水は今の鴨綠江、鹽難水は今の佟佳江なれば、西安平は鴨綠江の下流に在ること先づ疑なし。後漢書の郡國志、三國志の魏志高句麗傳、晉書の地理志等には西安平に關する記事屢々散見すれども、其位置を推定するの資料としては殆んど用を爲さず。然るに三國志の吳志孫權傳には、孫權が高句麗を招徠せんとして、嘉禾四年頃使者を遣はし、又安平口ともいふが、その使者は安平ともいふに至り、其處に來りて會見せる高句麗の使臣を劫かして、遂に高句麗王位宮を屈服せしめ、その獻ぜる馬を舟に載せて海路建業に歸れる由を記せり。之によるに、吳使は明かに鴨綠江口より入りて安平に上陸せしなり。さて安平一に安平口ともいふ、安平口の名は安平城が鴨綠江の一流の河口に位することを示す。鴨綠江下流域に於いて支流として數ふべき

もの、蒲石河安平河及鬩河あり、安平河の名頗る人をして惑はしめんも、此名は清初の頃より始めて現はれしものなれば、據つて以て安平の位置を定むるに足らず、殊に西安平(又は安平)城は東西交通の要衝たりしことは、帶方縣令が樂浪郡太守の妻子と共に旅行の途上此西安平に於いて高句麗王伯固に攻め殺されし事實(魏志高句麗傳)にて明なれば、今の蒲石河口安平河口等が古の西安平城たらざりしこと亦疑なし。是に於いて予は鬩河口なる九連城を以て古の西安平縣の治所、即ち西安平城若くは安平城なりと推定す。杜佑の通典に「馬訾鹽難の二水合流して西南安平城○○○に至りて海に入る」とあるは、漢書の記事が「西安平縣の管内に至りて」なるか、「西安平縣城に至りて」なるか、曖昧なりしとは異なり、予の推定に一層の根據を與ふるものと見るを得べし。學者或は西安平を以て今の安東縣に比定すれども、安東縣は三十餘年前光緒二年始めて開かれたる新都會にして、その地低

濕沮洳、近代の文明的施設によりて始めて江水の氾濫を支ふるを得るのみ、漢代の昔に在りては、此地は常に水底に在りしものと想像せらる。故に取らず。

唐の世には大行城として知られたりしもの、如し。唐の太宗の貞觀二十二年、薛萬徹は兵三萬を率ゐ、萊州より海に泛び高句麗征伐に向ひし時、鴨綠江を浜りて沿江の諸城を攻め破れり。舊唐書の薛萬徹傳には「入鴨綠水百餘里至泊溝城……城主所夫孫率步騎萬餘人拒戰、……賊大潰、追奔百餘里、於陣斬所夫孫、進兵圍泊溝城。其城因山設險、阻鴨綠水以爲固、攻之未拔、……萬徹分軍以當之、鋒刃纒接、而賊大潰云々」とあれど、賈耽の道里記によれば、鴨綠江口より泊溝城までは百三十餘里あり、殊に此文によるも所夫孫は城を出て唐軍を防ぎしこと明なれば、「百餘里云々」は江口より始めて兩軍の會戦せし地までの距離なり。新唐書の高麗傳には「萬徹次泊溝城拒四十里而舍……大倉所夫孫拒戰、萬徹擊斬之、遂

圍城云々」とありて、稍々此間の消息を傳ふれども冊府元龜の外臣部征討第四に「薛萬徹渡海入鴨綠水、百餘里至泊溝城南四十里止營云々」とある記事の明快なるに及ばず。而して更に新唐書の薛萬徹傳を見るに、「次鴨綠水、以奇兵襲大行城、與高麗步騎萬餘戰、斬虜將所夫孫、虜皆震恐、遂傳泊溝城云々」とあり。之れ唐軍と所夫孫との戰は大行城に於いて起りしものにして、大行城は泊溝城の南四十里に在りしものと推測せらる。然らば泊溝城の位置如何。賈耽の道里記に「鴨綠江北泊溝城云々」とも「自鴨綠江口舟行百餘里、乃小舫泝流東北三十里、至泊溝口、得渤海之境、又泝流五百里至九都縣城、故高麗王都云々」ともあれば、泊溝城は鴨綠江口より百三十餘里なる上流の北岸即ち右岸に位し、又その一名泊溝口とあるより、某支流の河口に臨める都會なることを知るべし。而して唐の一里は今の我四町乃至五町に相當するが故に、江口より泊溝城までの距離は大約

今の我十四五里乃至十八里と測定するを得べし然れども所謂江口は今の何れの地點を指すべきか、賈耽の時代は今を距ること一千百餘年以前なれば、此間に鴨綠江口は多大の變遷を經たりしならんとは、その下流の兩岸の地形並びに江中に存する島嶼の多きを見て何人も能く想像すべし。而も其地點を確定することは、地理學者の精密なる實地研究に由るの外なし。要するに江口よりの距離だけにては泊沔城の位置を明にすること、少くも今日に於いては不可能なり。然るに賈耽は、九都と泊沔城との距離を五百里と算せること、前に引用せる文に見るが如し、之れ吾人に此問題解決の鍵を與ふるものなり。蓋し從來全く不明に屬したる九都の位置は、去る明治三十八年中、輯安縣の西北九十浬里なる板石嶺に於いて發見せられし斷碑によりて同縣城即ち洞溝附近たること疑なきに至りたれば、之より我六十里乃至七十里の下流に泊沔城を求むるに、大約今の蒲石河附

近に當るべし、殊に蒲石と泊沔との音の近似は決して偶然にあらずと思はるゝが故に、姑く蒲石河口の鼓樓子附近を以て唐の泊沔城に比定せんと欲す。人或は前に引ける舊唐書の記事に「因山設險」の語あるを見て、この比定を疑はんも、元來泊沔城は江邊唯一の名城たりしに非ず、當時此外に大行城辱夷城等ありしなり、即ち泊沔城が必しも江邊第一の堅城又は防禦陣地たりしものと思惟するの要なく、かの「因山設險」の語も支那の著述家に普通なる文飾に外ならざるやも知るべからず。かくて泊沔城を今の鼓樓子附近なりとせば、大行城は蓋し今の九連城なるべし。たゞその距離や、遠きに過ぐの嫌あれど、江口より流を沝れる唐の水軍が九連城を占領することなくして直に泊沔城に迫ること、全く不可能なればなり。人或は泊沔城を九連城に、大行城を安東縣に比定すべきにあらずやと言はゞ、予は道里記及び新舊兩唐書の記事を根據とし、且つ江口變遷の假定の

下に立説したるのみと答へて、更に嚴正なる批評を乞はんのみ。

遼の世には蒲州營の名を以て知られたり。遼史の兵衛志邊境戍兵の條に、來遠城宣義軍に屬する八營を數へて、太子營大營蒲州營新營加陀營王海城柳白營沃野營を擧げたり。來遠城は、高麗史の樂志に、靜州の管内にて水中に在りと見ゆれば、義州の西南にて鴨綠江中の黔同島又は威化島の中に在りしならん。同じ高麗史の睿宗世家に金軍が遼の來遠城及び大夫乞打柳白の三營を襲ひ、悉く遼軍の戰艦を焼き拂ひたれば、遼將は官民を船に乗せ、鴨綠江口に出て、海に浮んで逃れ歸りし事を記す。之れ大夫以下の三營が何れも鴨綠江口に近く、又來遠城の附近に在りしことを示す。而して此三營は遼史の太子加陀柳白に外ならず、隨つて蒲州營も亦此一城三營と相近かりしものと推測するを得べし。即ち蒲州と唐代の泊汭とは一音の轉訛ならんも、遼代に至りて、そ

の名は蒲石河口を去りて今の九連城に移りしものと推定す。尙次の條を參照すべし。

金の世には婆速府の名を以て知られたり。金史の地理志に婆速府路あり、本紀諸志に婆速府の名屢々見ゆるも、而もその位置を考定するに足るの記事なし。獨り高麗史の庚應圭傳趙位寵傳高宗本紀等に散見する記事は、その地が鴨綠江の西岸に在りて江を隔て、義州と相對せるが如く推測せしむるのみ、而も未だ的確に九連城に比定するを得ず。たゞ婆速の名は直に前代の蒲州を承け、其音譯字を變じたるのみなることは疑なからん。

元の世には婆娑府として知られたり。世祖の至元六年七月高麗の王世子燕京よりの歸途、婆娑府に至りし時、靜州今の義州の南の官奴丁伍孚といふもの、潜かに鴨綠江を渡り、林衍が國王を廢したることを告げたるに、王世子は驚き悲みて再び燕京に歸れり(高麗史元宗世)。翌七年より十三年に至るの間に、義州及びそ

の南なる靜州麟州威遠鎮等は東寧府の管轄を離れて
婆娑府に隸し(元史世祖本紀地理志)、英宗の至治二年、高麗の林

仲沆は元に赴かんとして婆娑府に至りしに、其地の
官吏に驛馬の給與を拒まれ、遼東に入ること能はず

して歸れり(高麗史忠肅王世家)。又順帝の至元八年、高麗の賀

節使李凌幹の一行に加はれる名儒李穡(號牧)が、開州

站(今の鳳城)を経て婆娑府に來りし時の詩に、「婆娑居民

語音別、咫尺風氣如胡越」の句あり(牧隱集卷二)、至正十

五年尹之彪に隨つて燕京に赴くの途、義州を過ぎて

婆娑府に至るや、「馳驅中原第一程、滿天雲薄耿明星、

長吟豈獨華夷辨、誠意關中夢已醒」の詩を賦せり(牧隱集卷三)。以上の事實は、皆婆娑府が鴨綠江を隔て、義

州と相對することを示さざるはなし。殊に元一統志

に「大蟲江在遼陽路、發源縣東南之龍鳳山分水嶺下、

東南流、經歷婆娑府、南流合於鴨綠江(滿洲源流考卷十二所引)と

あるは、吾人をして最後の斷案を下さしむるものなり。

即ち茲に所謂縣は遼陽縣(今の遼陽)、龍鳳山は今の龍鳳

臺山、分水嶺は今の草河口の西なる分水嶺を指し、
廣婆娑府とあるは、世祖の至元の末に、婆娑府は廢

せられて婆娑巡檢司となりしによりて此く言へるな
れば、所謂大蟲江は今の驪河を指せるに外ならず今は草河を以て驪河の本流とは見ず

隨つて婆娑府は今の九連城たること一
點の疑なきなり。元の婆娑府は金の婆娑府を承け、金の婆娑府は遼の蒲州管を承けたるものなることは蓋疑なし

明初には婆娑府又は婆娑堡と呼ばれ、後始めて九

連城の名見え、以て今日に至れり。明の太祖の洪武

二十一年、高麗の沈徳符は、李成桂(朝鮮の太祖)に隨つて

征明の途に上れる時、婆娑府に次したること其の行

狀(燃藜室記述卷三)に見え、代宗の景泰四年、朝鮮の徐居正

が、その王、世祖に隨つて北京に赴くの途、婆娑堡に

宿りしことあり(燃藜室記述卷八)。婆娑府は元の世祖の末年

に廢せられしに拘らず、その名は明に至りても、尙

久しく残りたりしなり。九連城の名は何れの時より

始まれるか、明かに之を知り難きも、予が知る所に

よれば、稗官雜記に「嘉靖甲申^三年、遼東九連城馬頭山等處居民、利其沃腴、移住耕種、仍結義州邊民往來買賣云々」とあるを最も古しとす。されば景泰四年より嘉靖三年まで約七十年の間に於いて、婆娑の名に代りて九連城の名が用ゐらるゝに至りしなるべし。その後、萬曆二十四年に至り、九連城を以て鎮江游擊府と爲し、爾來鎮江城と呼ばれて、今の清朝に及び、乾隆年間には尙此名を以て稱せられしがその後何れの時よりにや、舊名に復して九連城は此地の普通の名稱となりぬ。

之を要するに、九連城は兩漢以來、晉の世に至るまで西安平若くは安平と呼ばれ、高麗の領地たりし唐に間も然りしならん唐には大行城と稱せられ、遼に至りて蒲州の名起りてより、婆娑婆娑など、多少の轉訛と文字の相違とこそあれ、同一名を以て呼ばれたりしに、明の嘉靖の初若くは其以前に、新に九連城と稱せらるゝに至れるなり。さて此九連城の名稱の起源を考ふるに、こは

前に言ひ及べる遼の來遠城と之に屬する八營と、合せて九城が、鴨綠紅の島上より其西岸にかけ、相連りて存せるより、遼時代若くは後世に自から此かる俗名起りしものが、明の世に至りて格段なる一城の名として用ゐらるゝに至りしものならん。

(明治四十四年九月二日稿)

支那の砲と抛石

松井 等

日本書紀推古天皇二十六年の條に、秋八月癸酉朔、高麗遣使貢方物、因以言、隋煬帝與三十萬衆攻我、返之爲我所破、故貢獻俘虜貞公普通二人、及鼓吹簞^〇、^〇抛石之類十物、並土物駱駝一疋と見ゆ。國史大系本の頭注に、^〇抛、水本集解作抛^〇とあり、抛石とする方正しかるべきことは、下に云ふ所にて知らるべし。この抛石とは、明代以前に謂ゆる砲のことなり。書紀の文意を推すに、この時高麗より献上したる